

八角堂

八角堂は、かつて神道と仏教を融合して信仰していた神仏習合の施設であった石清水八幡宮の一部をなした主要な仏教関連の建物の中で、唯一現存しているお堂です。八角堂にはかつて、石清水八幡宮の本殿に祀られていた八幡神と強い繋がりがあった仏である、阿弥陀如来の高さ 3 メートルの木像がありました。

八角堂は、比較的珍しい建築様式で建てられた八角のお堂で、正八角形ではなく、壁面の幅は全部が同じ長さというわけではありません。それは正八角形ではなく、角が切り取られた正方形のような形です。八角堂はもともと 13 世紀に建てられたものですが、現在の形となったのは 17 世紀にまで遡ります。このお堂は、高位の貴族や権力者からの寄進で何度も再建・修繕されました。この経済的支援は、当時広まっていた阿弥陀如来と八幡神への信仰の強さを反映しています。

1868 年に明治新政府は神仏分離を命じ、石清水八幡宮から全ての仏教建造物と仏像を取り除かなければならなくなりました。八角堂を救うため、近くの正法寺の元住職は、1870 年に現在地である古代古墳の頂上にこのお堂を移しました。

阿弥陀如来像は、1998 年から京都国立博物館で展示され、2008 年に正法寺へ移されました。その像に彫刻家の署名はありませんが、その様式から、鎌倉時代（1185～1333）の有名な彫刻家、快慶の作品である可能性があると指摘する研究者もいます。この像は国指定重要文化財に指定されています。

八角堂が元々あった場所と現在地は、石清水八幡宮の境内の一部として、2012 年に国指定史跡に指定されました。お堂自体には大規模修繕が行われ、2019 年に完了しました。徹底的な分析に基づき、このお堂の内側と外側は、その何世紀も前の姿を再現するために明るい色に塗り替えられました。

八角堂の内部は通常、一般公開されていませんが、年に数回の特別な機会に公開されます。